

して陸地測量部の東亞輿地圖(百五十萬分一)と五萬分一圖とは必ず備ふべきものなり。

以上は普通一遍の調査者の一覽せざるべからざるものにして其一二を除きては閱覽購求容易なるものなり、地理書及び地圖の書史は「朝鮮史の棗」の如き所謂「棗」に於ては記述の範圍を超ゆるが故に之を誌さず次に前記諸書に就て簡單なる説明をなすべし。

春日版雕造考

大屋 徳 城

世に春日版と稱する古刻書の一つあり。南都興福寺にて雕造したるものに係る。其の春日版と稱するは、興福寺と密接の關係を有する春日明神に因みて起りしものなるべく、從ひて其の雕造の趣旨は一に春日明神の法樂に供へ神威を増さんとす

るにありしこと疑ひを容れず。建仁刊成唯識論の跋に云く。

爲報春日四所之神恩敬彫唯識十軸之論模爲聖朝安穩天下泰平興隆佛法利益有情矣建仁元年八月十三日始之至同二年六月廿日其功畢施入沙門要弘

又承久刊成唯識論の跋に云く。

願繼應理宗法命 久惜春日靈威光 速生有情類慧解 皆共必得龍花盆

春日明神は慈悲萬行菩薩として、興福寺の法燈擁護の神明なりと信せられ、本地垂跡説の大成するや、一宮は本地不空罽索、二宮は藥師如來、三宮は地藏菩薩、四宮は十一面觀音、若宮は文殊(又四宮の如し)と稱せられたり。(大乘院と一乘院とに於いて各別の口傳あり)興福寺濫觴記而して、興福寺は北寺と呼はれ元興寺の南寺に對して法宗相の重鎮法相燈明記たりしかば、春日明神は又法相擁護の神明として、上流信仰の中心たるの觀あり。故に春日の神威を惜む

はやがて唯識中道の陵夷を惜むの謂にして、春日の法樂に供するはやがて唯識の慧命を續き、法相の流通を助くる所以にてありき。寛治刊成唯識論の跋に云く

興福伽藍學衆諸德爲興隆佛法利藥有情各加隨分財力課工人鏤唯識論一部十卷摸寛治二年正月廿六日畢功願以此功德廻向諸群類往生內院聞御信解證唯識性速成佛道 摸工僧觀增

然るに、春日版の概念は斯くの如しとするも、世に謂はゆる春日版なるものに就いては、種々の説ありて、朝倉氏の「日本古刻書史」に詳述せり。今便宜上其の説を引用す可し。

春日版の起由及其範圍に就きては是を廣義に解するもの、狹義に説くものとの二説あり。廣義説は曰く春日版の名稱は近時好古者流が古刻書研究の當時兩都諸寺開版する所の古刻經文にして刊行年月を記さざるもの多きを見、便宜上是等を總稱してかの高野版、五山版等の名目あるに對しかく命名せしものなり而して此春日版を印刷せし古版本は兩都興福寺を始め諸寺に現

存せるもの頗る多し、是等古版本の多くは每版面の右隅に年代寺名或は施主彫手の姓名を隱文に彫刻し、本文と齊しき陽文の奥書あるもの甚だ少し、此隱文は印刷の際紙面に摺込まれざるを以て春日版の多くは年月を記せる奥書の稀なる所以なりと狭義説は曰く、春日版は當時代(鎌倉)の初期春日社附屬の彫刻僧の作りしもの、或は其系統を引けるものにして、稿字蒼古紙其熱色共に精良なるものを指す。而して其名稱は春日社に關係ありしこと、建仁元年刊「成唯識論」の奥書に「爲報春日四所之神恩」承久三年刊「成唯識論」の奥書に「久惜春日靈威光」とあるに起由せるものなるべし、若し當時代より江戸時代に至るまで隆盛を極めし兩都諸寺に於いて開版せし所の古經を總稱せんには是を南都版とも呼ぶべく春日版は其中の一種優秀なるものと見るを可とす。

思ふに春日版の名稱は維新以前の諸書に見えず、近時好事家等の私稱なるべし、由來兩都諸寺に於ける開版は平安朝に發し江戸時代に至るまで續々絶えず、殊に後世四方を勸進して古版本により再構三構をなせるもの頗る多し、此中自から二種の別あり、一は其版式整然として文字亦道勁紙質精良にして墨色絶佳なるもの、一は之に反りて極めて雑碎たるものなり、前者は多く鎌倉時代の開版に屬し、後者は多く室町時代の開版に屬す。而して現今好古者流が特に春日版と稱して珍藏せるものを見るに

悉く前者にして後者は捨て顧す、されば其起由説の當否は姑く措き、もし古刻書として春日版の特色及其範圍を問ふものあらば予は狹義説を以て之に答ふるに躊躇せざるものなり^上已

余思ふに、廣義説の探る可からざるは、鎌倉時代法隆寺東大寺唐招提寺西大寺並に南都系の太秦桂宮院^{山城}等にて雕造したる摸版若くは刷成せられし紙本が、春日興福寺雕造のものど文字の配列、書風、版式用墨用紙等を異にし、全然別物と觀ざる可からざるを以て明かなり。然るに若し狹義説を採る時は好事者の謂はゆる春日版には當れども室町以下春日興福寺にて雕造したる摸版が其の形式全く之れと同一にして、其の書風は時代に依りて、幾分の差異ありとするも、大体は同形式のもの多く現存するを奈何せん。故に余は左の如く定義するの尤も科學的分類法なるべきを信ず。

春日版とは平安朝より江戸時代に及び春日興福寺に於いて春日明神の法樂並に唯識弘通の爲に雕造開版したる佛典をいふ。

春日版雕造の起源は明かならず。現存中最古のもののは寛治二年刊『成唯識論』なり。而して、摸版として最古のものは『成唯識論述記』の建久六年の摸板なり。されど、此の間に全く開版なかりしかといふに、然らざるものゝ如く、跋語なき『成唯識論丁義燈』に左の朱書あるもの現存^{第一回大藏會陳列目錄}

成唯識論丁義燈卷一

(朱書與云)

保延四年八月十九日□□點了 沙門□□

又安元二年の朱書跋ある『法花搦釋』卷一卷四の二帖現存^{南都佛敎圖書館}

卷一、朱與書云)

安元三年酉三月廿三日儲之

永尊 (花押抹シアリ)

□始也

(墨書別筆云、而シテ全部抹ス)

傳領 實圓

(朱書云)

治承二年戊二月六日點畢 求尊 (花押)

卷四(奥書)

治承元年酉八月比儲之

沙門永尊

(別筆云)

傳領 實圓

依是觀之、唯識本論の疏たる『述記』『了義燈』の開版あるのみならず智周の『法華攝釋』さへ開版あれば、謂はゆる「三箇疏」の他の一たる『演秘』の開版ありしは推察するに難からず。之れを當時一般教界の風潮に觀るに、京洛縉紳の間には、寛治以前經文開版の風漸く盛んなりしは否定す可からざる事實なれば、南都に於ける開版の舉は決して一二に止らざりしなる可し。

酉時許明業奉摺寫供養心經五十卷壽命經卅卷

觀海爲講師、布施絹二疋

水左記、承保四年八月十日條

(上畧)今日姫君心地頗宜、御前御心地重令苦痛給仍奉摺寫供養仁王經六部(下畧)

同同年八月十四日條

(上畧)入夜奉圖繪供養十一面觀音像三千餘體(中畧)摺寫心經五百卷以永義阿闍部爲講師、

布施絹五疋(下畧)

同、同八月十九日條

心經、壽命經は短篇の小經に過ぎざれど、仁王經の摺寫に至りては、摸板術の漸く進歩して、摺寫の風既に熟せるを察するに足らん。

鎌倉時代に入りては唯識本論の開版少くとも二回あり。『述記』の開版一回あり。本論は沙門要弘發願して、建仁元年八月十三日着手し、翌年六月廿日に成る。十ヶ月にして十卷を刻すれば、恐らく個人の修善なる可し破語。次に承久辛巳(三年)初秋沙門弘睿寺命に依りて一部十卷の摸を造る。前者を私版とすれば、こは寺版なり。跋に云く

成唯識論 十卷

沙門弘睿蒙滿寺衆命造唯識論模突

承久辛巳初秋下旬彫刻功畢

願繼應理宗法命 久惜春日靈威光 遠生有

情類慧解 皆共必得龍花益

『述記』は建久六年成る。板木陰刻の銘に云く、福興

寺寶
庫藏

述記九卷一本摸板□□□御□講本承士之功所

彫造進也矣建久六年卯八月廿九日□僧堯盛

承久年中唯識本論を雕造せし摸工僧弘睿は先之建
曆癸酉(三年)『瑜伽師地論』一百卷を雕造せり。而

して建長元年堯心發願して、此の摸を再摺せり。

これ實に此の時代に於ける春日版中の最大印刷に

して、南都に於ける嘉祿版大般若六百卷の印成に

匹敵するものといふ可し。跋に云く、

沙門弘睿依專心上人命勸都鄙貴賤類奉彫瑜伽

論一部模干時建曆癸酉終功矣

願以作摸所生福 令法久住利有情 主伴

勸進結緣衆 共生知足終成佛 願以摺寫功

值遇大明神 生々學佛法 廣度諸衆生

建長元年七月五日 願主大法師堯心

正安元年覺性發願して最勝王至十卷の摸を造る。
然るに跋語に依れば、先之已に此經開版の事あり
恐らく此時代の初期なる可し。此經は唯識宗に關

係なければ鎮護國家の經典として、奈良朝に盛行
したるものなれば、此に六宗の一たる興福寺の住

侶に依りて開版せられしは極めてあり得べき事に

屬す。跋に云く。
此經國士大珍寶 人天諸神所歸處 佛法住此

經人住 王法依此經保護 而摸栴損文學消

如失眼目無所見 若無能詮最勝文 依何知經

所詮義 爲國爲法勵微力 更開摸傳末來際

三界所有諸天神 隨喜守護佛王法 四恩爲初

及法界 六道衆生得解脫

正安元年己六月 日

願主 南都興福寺僧覺性

此頃三論に永仁版『法華義疏』の開版あり。華嚴に

弘安版『五教章』の開版あり。律宗に正和版『作持

羯磨』の開版あり。法隆寺には寶治版『上宮王法花義疏』、文永版『勝鬘』『維摩』の開版、弘安版『十七憲法』の開版あり。南都の摸板亦盛んなりと謂つ可し。

覺性は又先之嘉元四年發願して『地藏本願經』を開版したることあり。跋に云く。

地藏菩薩本誓願 釋尊忉利附屬說 此經所明
發信心 故更刻摸傳末來 以此功德及法界
先救三途極重苦 人天厭離生死海 自他同獲
菩薩化

嘉元四年丙午六月廿四日

願主 南都興福寺覺性

これを信仰史上より考ふれば此の開版は當時漸興せし地藏信仰の刺激を受けたるものなる可し。而して、其の後の狀況は概括して之を別表に掲ぐ。此表は余が興福寺北圓堂に現存する春日模版を調査して得たる結果に余が研究を加へて作製したるも

のにして江戸時代以前のみを抄出せり。其中北圓堂經版に關しては明治二十七年奈良縣寶物掛の調査並に興福寺佐伯良謙師及び余の調査の結果を分類して之れを年表に作製したるものなり。

思ふに南北朝より室町の初期にかけて雕造の隆盛を極めたりしは、京都に於ける禪宗の勃興に従ひて臨川寺版、五山版等の頻出したる刺激にも依るべきも、又興福寺の經濟力の尙未だ弛緩せざるを示すものと觀ざる可からず。而して更に模版の内容容即ち經典の種類を觀察するに、南都佛教に適有なる『仁王經』『最勝王經』『法花經』『最勝王經疏』『無量義經』『法相宗關係の』『唯識論』『述記』『了義燈』『樞要』『演秘』『法花攝釋』『瑜伽師地論』『上生經疏』『義林章』『无性攝論』『世親攝論』『五部大乘經』として刻せしかと思はる、『大品般若』『花嚴經』『大集經』『月藏分』及び『大般若經』等其の主要なるものにして、其の他にも『雜集論』『優婆塞戒經』(元祿十年

後醍醐武元 華嚴經後分下ノ四

光明 延元 元二

曆應 元二

康永 元四

貞和 元三

崇光

觀應 元五

四月大般若經三百內八帙四卷五〇五月大般若經三百內八帙九卷三〇十一月大般若經五百內八帙八卷八
二月大般若經二百內二帙九卷三〇七月大般若經二百內五帙八卷六

〔曆應五年四月日〕〔曆應五年五月日〕
○康永元年十一月日永重
〔康永二年月日〕〔康永二年七月九日〕

三月大般若經四百內二帙二卷八〇八月大般若經三百內一帙十卷八〇九月大般若經三百內十帙二卷二〇十月大般若經三百內一帙十卷四〇
十二月大般若經三百內五帙五卷二
二月大般若經三百內四帙八卷五〇四月大般若經三百內十帙四卷一〇十二月大般若經四百內四帙八卷八
二月大般若經四百內二帙六卷四〇十月大般若經四百內八帙九卷八

〔貞和二年三月日〕〔貞和二年八月日〕〔貞和二年八月日〕
〔貞和二年九月日〕〔貞和二年十月日〕〔貞和二年十二月日〕
〔貞和三年二月日〕〔貞和三年四月日〕〔貞和三年十二月日〕
〔貞和四年二月日〕〔貞和四年十月廿日〕

六月大般若經三百內九帙九卷三
十月大般若經三百內七帙九卷六

〔貞和五年六月廿五日〕
〔觀應元年十月七日〕

五月大般若經五百內三帙五卷五〇六月大般若經五百內二帙八卷四〇八月大般若經三百內八帙三卷七〇十月大般若經六百內九帙十卷七〇十一月大般若經五百內一帙五卷一

「貞治四年五月十日順」
「貞治三二巳六月十日」
「貞治二二巳八月卅日」
「貞治三二巳十月廿日」
「貞治四年巳十一月日久弘」

正月大般若經三百內三帙九卷二〇三月大般若經三百內五帙四卷二〇三月大般若經初百內五帙一卷五〇四月大般若經三百內十帙六卷五〇五月大般若經三百內六帙八卷三〇八月大般若經二百內八帙四卷四〇十月大般若經三百內七帙二卷七〇十一月大般若經初百內五帙

「貞治六年正月日」
「貞治六年三月廿日」
「貞治六年卯月卅日」
「貞治六未五月卅日」
「貞治六未三月廿日觀齋房ノサ夕日」
「貞治六年八月日」
「貞治六年十月十日」
「貞治六年十一月廿日重禪得之」

應安

正月大般若經三百內八帙五卷二〇八月大般若經初百內七帙三卷五〇六月大般若經五百內六帙六卷三〇十二月大般若經六百內二帙十卷五〇十一月大般若經六百內六帙六卷七

「貞治七年正月十日」
「貞治七年正月廿日順」
「應安二戊五月廿九日」
「應安二年八月日久弘奉行胤玄」
「應安三申六月廿日」
「應安三戊十二月十日」
「應安四年十一月十日」
「應安子五月卅日」

五月大般若經六百內八帙七卷三〇六月大般若經三百內三帙二卷二〇六月大般若經四百內三帙二卷二〇十月大般若經五百內八帙八卷四〇十一月大般若經五百內九帙二卷六〇十一月大般若經四百內十帙九卷三

「應安六年丑ノ分五枚之内」
「應安六年三月廿日」
「應安六年六月廿日」
「應安六月十月卅日」
「應安六年十一月廿日」
「應安六丑年十一月卅日」

〇二月大般若經二百內十帙七卷三〇五月大般若經六百內三帙二卷一〇七月大般若經四百內五帙七卷四〇八月大般若經六百內八帙六卷五〇八月大般若經五百內七帙六卷四〇十月大般若經四百內八帙六卷八〇十月大般若經六百八帙五卷六〇十二月大般若經初百內一帙一卷六

「應安七年二月日分五枚之内中御門永算」
「應安七年五月日分五枚之内中院」
「應安七年八月十日」
「應安七年八月十日」
「應安七年十月十日」
「應安七年十月日分中御門大貳」
「應安七年十二月廿日」

〇三月大般若經五百內十帙六卷五〇三月大般若經五百內十帙八卷八

「應安八年卯三月廿日」
「應安八年三月廿日」

元	二	三	元	二	元	四	三	二	元
四月大般若經五百內八帙五卷六〇四月大般若經五百內十 帙五卷三〇四月大般若經五百內八帙五卷四〇五月大般若 經初百內四帙七卷三〇五月大般若經二百內六帙二卷五〇 正月大般若經六百內九帙二卷一〇九月大般若經五百內七 帙五卷八〇九月大般若經五百內十帙三卷七〇十一月大般若 經六百內五帙一卷一	二月大般若經三百內七帙六卷二〇五月大般若經三百內五 帙四卷一〇六月大般若經五百內七帙六卷一〇三月大般若 經三百內九帙九卷二〇十二月大般若經五百內七帙四卷五 〇十二月花鳥經六帙十ノ六	四月大般若經四百內十帙十卷一〇九月大般若經六百內八帙 三卷二〇十月大般若經四百內五帙六卷五 〇七月大般若經六百內三帙九卷一〇九月大般若經六百內 三帙三卷八〇九月大般若經六百內二帙二卷八 三月大般若經六百內一帙八卷八〇五月大般若經三百內七 帙八卷二〇六月大般若經三百內十帙五卷四〇十一月大般若 經初百內八帙一卷五	八月大般若經六百內十帙一卷一〇九月大般若經六百內二 帙十卷八〇九月大般若經六百內四帙八卷一〇十二月大般若 經二百內五帙七卷二	六月大般若經二百內六帙六卷五 〇六月大般若經二百內六帙六卷五 〇五月大般若經三百內七帙一卷二 〇五月大般若經三百內七帙一卷二 正月大般若經初百內十帙三卷五 〇十二月大般若經三百內五帙一卷三 〇八月大般若經初百內三帙一卷六 〇十月大般若經四百內五帙一卷二 十二月大般若經初百內十帙九卷四					

- 「永和元年卯四月十日」「永和元年四月廿日」「永和元年卯
四月十日」「永和元年五月日」「永和元年五月七日」「永和元
年七月十二日大貳」「永和元年九月日順」「永和元年九月日
順」「永和元年十一月廿日」
- 「永和二年二月日」「永和二年五月十日」「永和二年六月卅
日」「永和二年六月廿日」「永和二年十二月八日中院內大貳
」
- 「永和二年十二月日奉行胤玄」
- 「永和三年四月日」「永和三年九月十三日 伴」
- 「永和三年丁巳十月日クハスハラサタ信」
- 「永和四年七月六日」
- 「永和四年九月十日」「永和四年九月十日」
- 「永和五年三月日」「永和五年午五月九日」「康曆元年六月
日」「康曆元年十一月日」
- 「康曆二年八月廿九日」「康曆二年申九月十日」
- 「康曆二年申九月十日」「康曆二年十二月日」
- 「永德元年六月廿日」
- 「永德元年五月十日」
- 「永德二年五月十日」
- 「永德二年五月十日」
- 「永德三年正月卅日」
- 「永德三年十二月卅日」
- 「至德元年八月廿日」
- 「至德元年十月廿日」
- 「至德二年ウシノ十二月日」
- 「至德二年ウシノ十二月日」

第二卷 雜纂 春日版雕造考

嘉慶元 三 三月大般若經初百內九帙八卷七
 五月大般若經三百內四帙五卷二

〔至德三年三月廿日〕
 〔至德四年五月日〕

康應元 二 三月大般若經四百內二帙十卷二〇 十二月大般若經三百內
 二帙五卷八

〔明德元年午三月晦日〕 〔明德元年十二月廿日〕
 〔明德二年十月廿日〕 〔明德二年十月日〕

明德元 二 三月大般若經四百內九帙六卷一〇 七月大般若經初百內七
 帙四卷八〇 八月大般若經初百內五帙四卷一〇 八月大般若
 經初百內六帙四卷一〇 十月大般若經二百內五帙五卷一

〔明德三年六月廿日〕 〔明德二年七月十日〕 〔明德三年八月
 十日〕 〔明德三年八月日〕 〔明德三年壬申十月廿日〕

後小 二 六月大般若經二百內三帙六卷一〇 七月大般若經二百內三
 帙三卷三〇 十月大般若經二百內四帙九卷七〇 是年大般若
 經二百內四帙四卷五

〔明德四年六月廿日〕 〔明德四年癸酉七月八日〕 〔明德四年癸
 酉十月廿日〕 〔明德四年癸酉月日〕

元 三 四月大般若經二百內七帙十卷一
 〇 十二月大般若經四百內六帙六卷八
 七月大般若經四百內七帙三卷八
 〇 九月大般若經五百內八帙七卷九

〔應永二四月日〕
 〔應永四年十二月日〕
 〔應永五年七月十日〕
 〔應永五九月日〕

八 正月大般若經六百內七帙一卷四
 二月大般若經六百內十帙八卷二〇 四月大般若經三百內五
 帙六卷二〇 十月大般若經二百內二帙二卷〇 十二月大般若
 經二百內二帙二卷三

〔應永七年正月十三日五枚之内中御門分〕
 〔應永八二月日〕 〔應永巳四月三日〕 〔應永八月十日〕
 〔應永八十二月日〕

稱光

九	二月大般若經二百內 正月大般若經二百內二帙十卷六	〔應永九一月一日〕 〔應永九二月一日〕 〔應永十亥正月日〕
十	二月大般若經二百內三帙十卷一〇 七月大般若經四百內三卷一	〔應永十二正月日〕 〔應永十二七月日〕
十一	二月大般若經二百內三帙十卷一〇 七月大般若經四百內三卷一	〔應永十三年七月日〕 〔應永十三年九月廿三日〕
十二	二月大般若經二百內三帙十卷一〇 七月大般若經四百內三卷一	〔應永十四二月日〕
十三	二月大般若經二百內三帙十卷一〇 七月大般若經四百內三卷一	〔應永十五一月日〕
十四	二月大般若經二百內三帙十卷一〇 七月大般若經四百內三卷一	〔應永拾陸年九月漆日 重開〕 〔應永十六年十一月十八日〕
十五	二月大般若經二百內三帙十卷一〇 七月大般若經四百內三卷一	〔應永十八年二月廿四日〕 〔應永十八年十月日〕
十六	二月大般若經二百內三帙十卷一〇 七月大般若經四百內三卷一	〔應永十九年四月日〕
十七	二月大般若經二百內三帙十卷一〇 七月大般若經四百內三卷一	
十八	二月大般若經二百內三帙十卷一〇 七月大般若經四百內三卷一	
十九	二月大般若經二百內三帙十卷一〇 七月大般若經四百內三卷一	
二十	二月大般若經二百內三帙十卷一〇 七月大般若經四百內三卷一	
廿一	二月大般若經二百內三帙十卷一〇 七月大般若經四百內三卷一	
廿二	二月大般若經二百內三帙十卷一〇 七月大般若經四百內三卷一	
廿三	二月大般若經二百內三帙十卷一〇 七月大般若經四百內三卷一	
廿四	二月大般若經二百內三帙十卷一〇 七月大般若經四百內三卷一	
廿五	二月大般若經二百內三帙十卷一〇 七月大般若經四百內三卷一	
廿六	二月大般若經二百內三帙十卷一〇 七月大般若經四百內三卷一	

第二卷 雜纂 春日版雕造考

第二號 一一八 (三〇四)

廿七 四月大般若經三百內六帙七卷六

〔應永廿七年四月六日〕

廿八

廿九 九月大般若經五百內三帙七卷一

〔應永廿九年壬寅九月廿一日 順榮〕

三十

卅一

卅二

卅三

卅四

正長元

後元

後花園

九月大般若經六百內八帙一卷三

〔永享二年九月八日〕

二

三

四

五

六

七

八

九

十

十一

嘉吉	十二元	三月大般若經三百內六帙二卷六
文安	三元	七月嚴勝王經一卷六枚
寶德	二元	三月嚴勝王經七卷六枚
享德	三元	○七月嚴勝王經十卷八枚 (已上百三十九年)
康正	二元	六月法華經八卷
長祿	二元	
文祿	四元	

第二卷 雜纂 春日版雕造考

〔寶德二年三月日〕

〔康正元年十一月日〕

〔康正三年三月日〕

〔爲寺門御沙汰順盛、長祿三年己卯七月廿六日供目代宗美奉行淨藝〕
 〔順盛、長祿四年庚亥三月十二日供目代實心奉行淨藝〕
 〔長祿四年七月廿九日供目代實心奉行淨藝〕
 〔春日社於若宮座板木在之開白沙門慶春長尊宗甫宗賢供養門實相房曉觀文祿四己未六月十日作六賢盛妙雲圓盛〕

第二號 一一九 (三〇五)